良寛の詩「仙桂和尚」について

黒　田　紀　也

岡山理科大学　教養部

（昭和58年9月20日　受理）

1

良寛の詩については，良寛と親交のあった鈴木桐軒・文台の兄弟が良寛から借覧して筆写したものに，桐軒の子鈴木順亭が業を継続した写本「草堂集」なるものがあり，さらに木村家・阿部家・解良家その他多くの遺墨所蔵者のもので良寛詩の大部分が漸次明らかになってきた。これらの中で写本にあって真蹟不明のものについて，写本にある字句に問題があって，良寛研究の先輩達を迷わせた詩の一つに「仙桂和尚」の詩がある。この詩の墨蹟が昭和44年5月20日大法輪閣発行の飯田利行著「良寛詩集譯」に富所甲子男氏蔵として掲載されていた。写真とその読みに納得しがたい点があり，数年前に富所氏宅を訪問した時，この詩の遺墨に接することはできなかった。本年5月8日，見附市の富田敏仁氏宅を訪問した時，長いあいだ渇望していた良寛の「仙桂和尚」の詩の遺墨に接することができた。

2

仙桂和尚は良寛にとっては兄弟子であった。仙桂は国仙の会下にあって30年間であると詩にある。国仙が円通寺で示寂したのは世寿69才，寛政3（1791）年3月18日である。仙桂が国仙の弟子となったのは宝暦12（1762）年のことである。この年は国仙が大泉寺随意会に昇格の許可を得た年で，国仙40才，仙桂は20才位であったと想定する。その後，国仙は相州田代の勝楽寺，備中玉島の円通寺と転住し，円通寺では23年住山した。その間，仙桂は一貫して国仙の会下にあった。良寛が22才で円通寺に入った頃，仙桂は37才，国仙は57才であった。既に仙桂は大泉寺以来17年も国仙の会下にあり，恐らく嗣法の事は終了していたであろう。この時，仙桂は典座の職にあった。道元は「典座教訓」の中でも「永平寺知事清規」の中でも，典座の仕事がそのまゝ仏道であることを説いている。食事の準備，粥を煮，飯を炊き，汁を作り，菜を料理する等一々が辨道である。典座の仕事の一つ一つが参禅や読経に劣らぬ仏道である。円通寺では開山徳翁良高和尚以来この事がまもられていたのであった。典座であった者が具体的に自己の仕事について残した資料はとぼしいが，「迦葉開山黙山和尚年譜」の黙山元轟が26才で隠之道顕和尚の東昌寺で修業していた時の記録を参考にしょう。

師二十六歳。東昌家常二時最淡。火頭不熟炊爨。動供生熟飯。是以病者頗多。師竊憂之。詣方丈云。願吾役于厨下。執炊爨。隠老即命。於是勇為。自爾一衆咸安。而有餘力則兀坐竈前如枯木。見者欽焉。

後来示徒曰。山僧曾在于東昌。執炊爨時。打飯之料入淅器了。又返一匊於本器。是以為常。汝等護惜常住。須憶山僧素意。

これは典座の下で炊飯係を務める者が水加減や火加減になれていないため大衆が胃腸を悪くしているのを見かねて自らその役を買って出た例である。後来以下は元轟が老境に達してから弟子達に，洗うべき飯米を洗器に入れてから，一掬だけもとの米櫃にもどして不

時の用意に残したことを教えている。つぎの例は，国仙和尚の兄弟子である大店鰲雪が，師高外全国和尚の会下で典座をつとめていた時の様子を，師全国の兄弟子である少林寺の黙子素淵が賞賛して与えた偈である。大店の獅子奮迅の働きぶりが目に浮ぶ偈である。

左にたづさえ右にひっさぐ月下の身
つとめにいどみて飯をたき茶を運びてやしなう
鰲山の杓柄上手にあり
汲み取る一千五百人

右偈を書きて鰲雪典座に示す

少林黙子老衲

18世紀におけるわが国の曹洞宗での典座のあり方については，黙山元轟や大店鰲雪を通して大体を知ることは可能である。しかし此等も道元の「典座教訓」に示されている阿育王山広利寺の61才の老典座と，天童山景徳寺の68才の用典座がともに老後の修行として寺の大衆の為に一生懸命に努力していることの教訓が脉々とまもり続けられている姿である。

仙桂和尚は広利寺の老典座の如く，黙々と畑を耕し，米をとぎ，修行中の大衆の為に盡していた。師の国仙和尚の示寂後は水月庵にあって師の墓もりをしていた。仙桂和尚は住職になることなどは念頭になく仏道に徹した一生であったということができる。文化元年10月16日仙桂が亡くなったことの報せが五合庵の良寛の許にとどけられたという。この手紙は恐らく30日の日数がかゝっていたことであろう。誰が良寛に仙桂の死を知らせたであろうか。それは当時長連寺の住職であった大霊嫩芝和尚であろう。嫩芝は寛政4年に長連寺6世となり，その後上下町の玉泉寺に転住，文化元年に長連寺に再住し，文化10年に円通寺に住山し本山16世になっている。嫩芝は良寛と同時期の国仙会下の門人で，仙桂の消息をよく知ることのできる立場にあった。仙桂の墓も嫩芝和尚によって建立されたのであろう。墓石には「南無観世音菩薩」とあり，下の台石には「文化元年10月16日」と「嫩蘂仙桂和尚」とが二行にわたって記されてある。

3

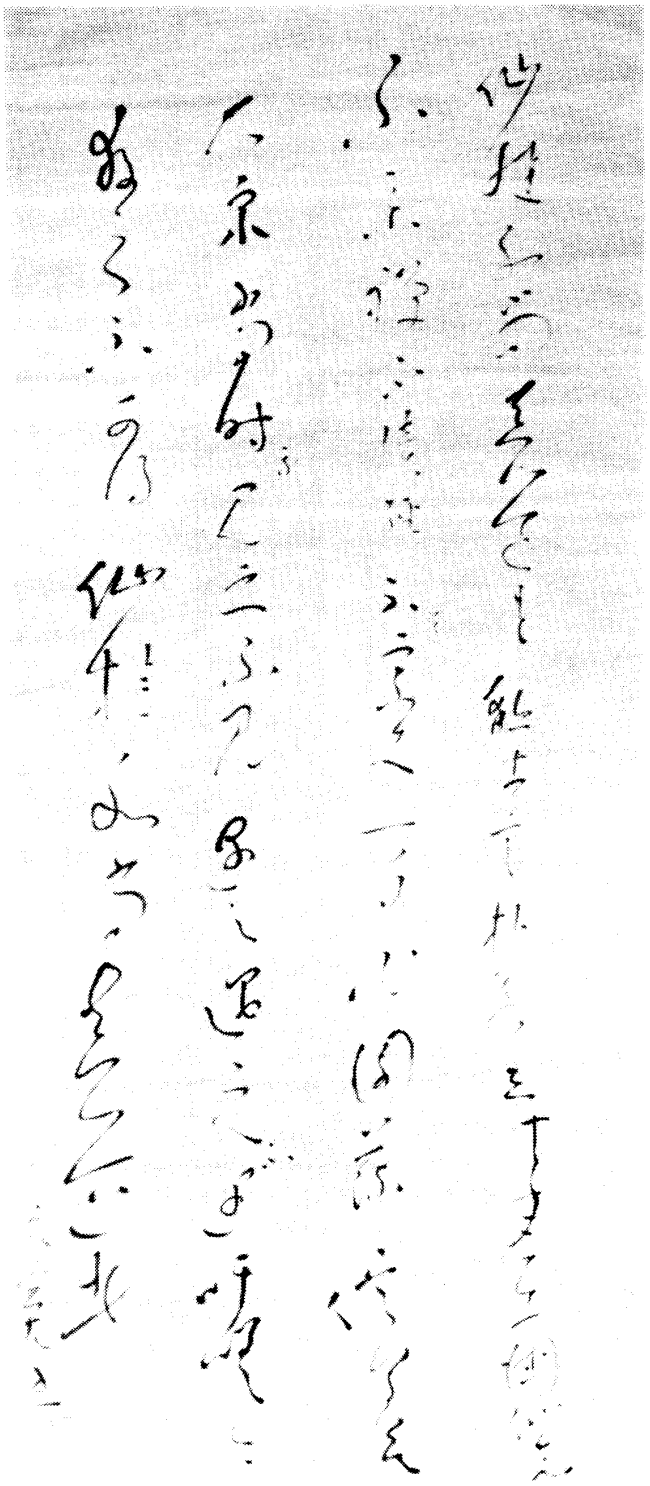
新潟県見附市今町富田敏仁氏蔵の良寛書「仙桂和尚」

仙桂和尚真道者	仙桂和尚は真の道者
貌古言朴客	貌は古　言は朴　の客
三十年在国仙会	三十年　国仙の会にありて
不参禅不読経	参禅せず　読経せず
不道宗文一句	宗文の一句をもいわず
作園菜供養大衆	園菜を作りて大衆を供養せり
当時我見之不見	当時われこれを見て見ざりし
遇之遇之不遇	これに遇いこれに遇えども遇わざりき

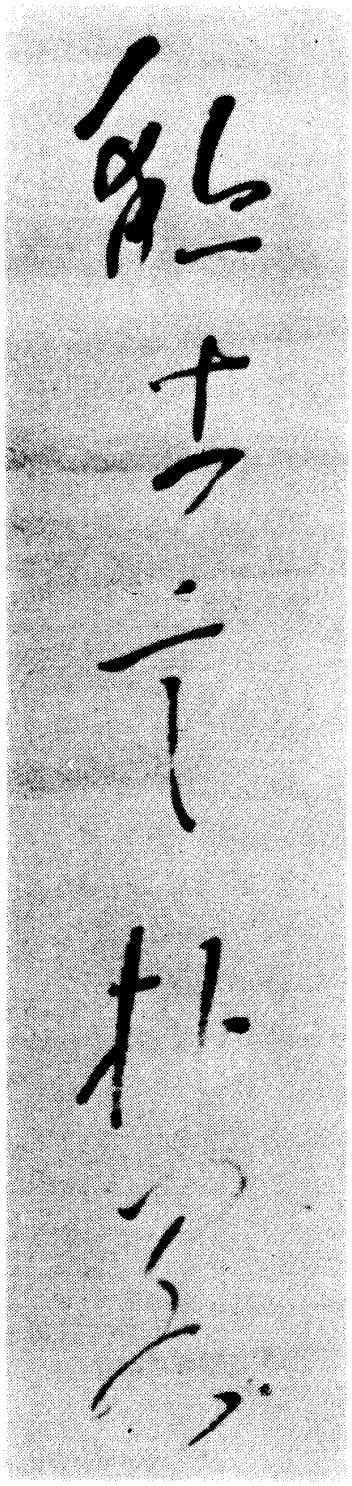
吁嗟今放之不可得　あゝ今これに放(なら)うこと得べからず

仙桂和尚真道者　　仙桂和尚は真の道者

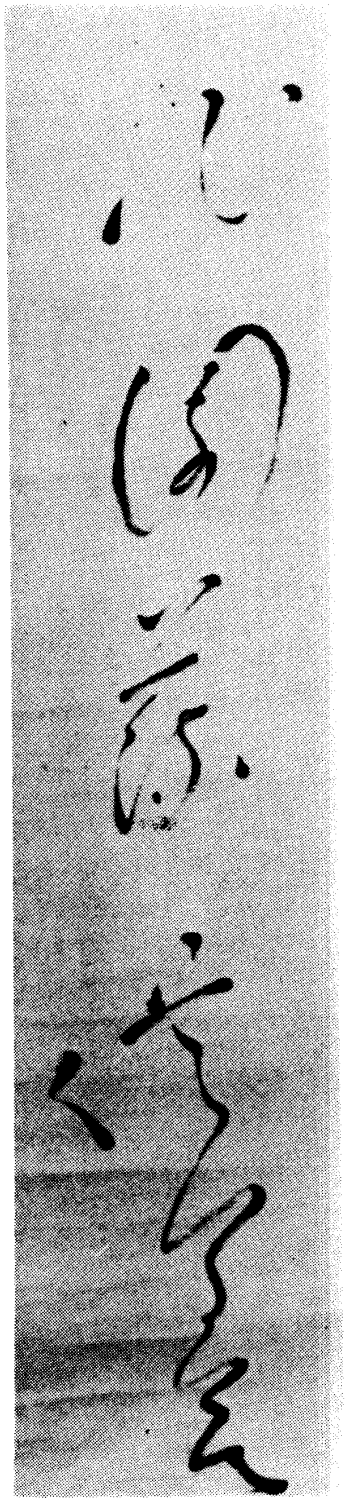
この書は文化元年良寛47才の時の書ではない。懐素や王羲之を手習いしていた頃の書でもない。そこを通り越した良寛自身のものが確立した書である。歌集であれば「くがみ」に近い。「仙桂和尚」，「真道者」，「供養」，「吁嗟」などがそれである。乙子時代後期から島崎時代前期，すなわち68才ないし72才頃の作品ではないかと思われる。さらに脱字3



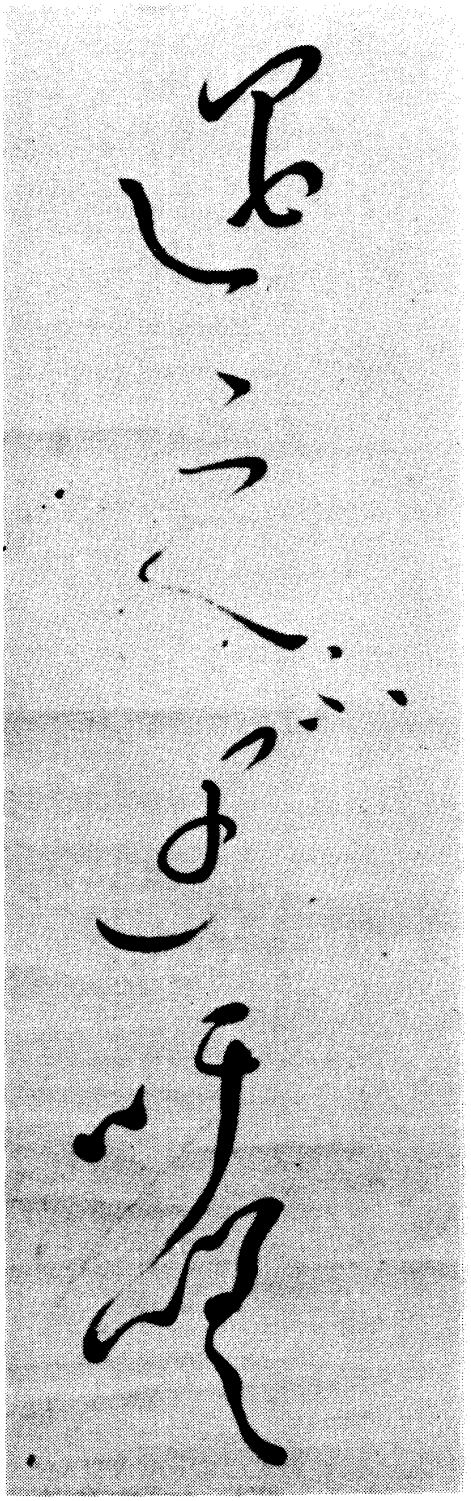
ケ所を丁寧に補っていることを考えると，禅の本質に関する内容を宗門関係の者に与えた書ではなかろうか。



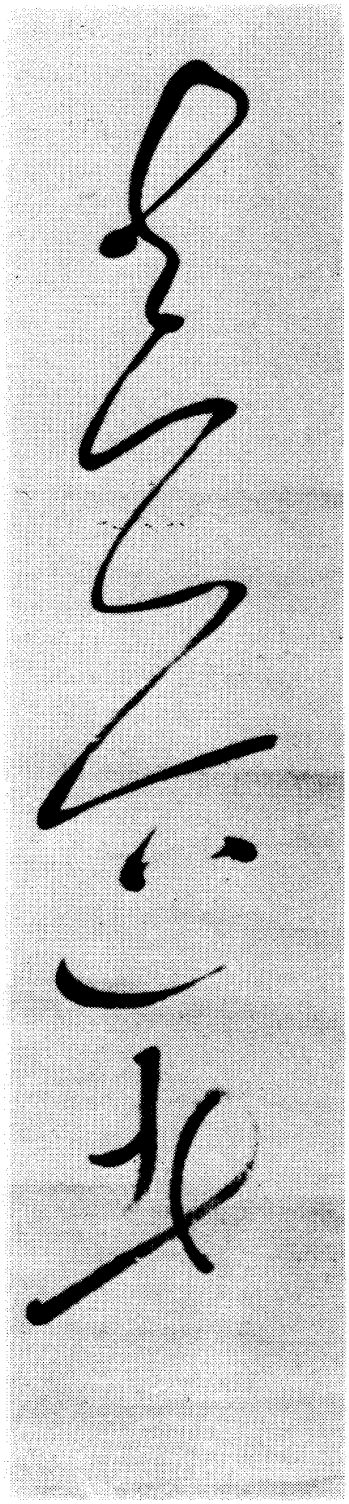
この句については「默士言朴客」、「默不言朴不客」、「默作言朴客」などの読みがあるが何れも良寛の遺墨に接していないか、または十分に読みきれなかった為の誤読に原因している。富田氏蔵の良寛遺墨を見る限り、「貌は吉にして言は朴なる客」と読むべきである。



この句は次の行の大衆までゞ一句になっている。「園菜を作りて大衆を供養せり」である。大衆すなわち修行僧たちが余念なく健康で修行にはげむことが出来るように努力することが、典座の仏道であり辨道であり、大衆の仏道の修行を助けることが供養であった。供養することが仏道であり辨道であるから、従来供養の養を欠いで「大衆に供す」とした場合があるが、それは誤りである。



この写真は、遇之遇之不遇（これに遇いこれに遇えども遇わず）の句につゞく吁嗟今放之不可得（あゝ　いまこれにならうこと得べからず）の前の句と後の句の接点の写真である。遇之が重複している。重複の一つを衍字と見る人もあるが、不遇の不が脱字になっているのを訂正して補っている位であるから衍字とは考えたくない。吁嗟を吁呼としたのが多いが富田氏蔵の「仙桂和尚」以外に良寛の「仙桂和尚」の遺墨が考えられない現在呼字は考えられない。



真道者という「仙桂和尚」の詩の最後をしめくゝる書である。仙桂をほめたゝえることは同時に良寛自身の境地の自信をしめすことである。この力強い筆勢の中に「やさしさ」とは別の良寛晩年の不退転の「つよさ」を見ることができる。

4

近代における良寛研究の集成者である西郡久吾氏の「沙門良寛全伝」では「仙桂和尚」の詩は「草堂集」からの引用である。

仙桂和尚者真道者
黙上言朴客
三十年在国仙曾
不参禅不読経
不道宗文一句
作園菜供大衆
当時我見之不見
遇之不遇
吁呼今放之不可得
仙桂和尚者真道者

1句と10句に「仙桂和尚者」と者がついている。2句に「黙上」となっている。6句が「供大衆」とある。8句に「遇之」が1回だけである。以上の4点に9句の「放」の字が

加わって，「仙桂和尚」の詩は各人各様に自己流に組み立てた「仙桂和尚」が展開してきた。然し，良寛晩年の「仙桂和尚」が出てきたのであるから，「迷える羊」は解決したことであるから，あとは訂正あるのみである。

ON "SENKEI"
the true Poem written by Ryokan

Michiya KURODA

Department of General Eduction
Okayama University of Science
1-1, Ridai-cho, Okayama-shi, Japan. 700

(Received September 20, 1983)

This poem had been kept a secret for a long time. There was a copy written by Juntei Susuki. In this copy there were some few words unable to understand. At the present age that true poem written by Ryokan belonged to the late Mr. Tomidokoro about fifteen years ago. Before I had a chance to read it, it had disappeared from our view.

Quite recently, I could appreciate the true poem written by Ryokan, that is to say, "SENKEI" by courtesy of Dr. Tomita. Dr. Tomita, he said, got it fifteen years ago.

When Ryokan wrote this poem, I think, he was seventy or thereabout by his handwriting.